

2020年1月8日(水)

夜間主課程の評価で避けて欲しいこと

電気通信大学 名誉教授 柳澤正久

2019年3月に定年退職するまでの約10年間、社会人を対象とした夜間主課程の運営を担当してきた。東京にある工科系単科大学であるが、10年前までは7つほどあった学科の一つ一つに夜間主コースがあり学生数は学年当り合計180名であった。ほとんどが仕事をしているわけでもない普通の学生であったために、改組によって昼間の学科とは独立の定員100名の「先端工学基礎課程」を作り社会人教育に力を入れることになった。それでも普通の学生が主となってしまい、現在では定員を30名に減らしている。専任教員はおかず、運営は16名の教員が原則任期4年の交代制で担当している。授業や実験は全学で分担している。

社会人といっても様々であるが、我々が対象としたのは平日の昼間は働いている通常の社会人である。大学を出ていないがために、あるいは文系大学卒であるために情報系、技術系の会社などで仕事内容が限られたり、待遇が悪かったりする者たちである。彼らのために、平日の午後7時半から9時までと土曜日の授業、実験だけで卒業できるよう時間割が組まれている。それでも就学を続けるのは容易なことではなく、会社が忙しくなれば授業に出られなくなる。転勤があれば途中で止めざるを得なくなる。基礎学力が不足しているために授業についていけない場合もある。当然、留年や退学が多くなる。問題は少なからぬ教員がそのために大学の評価が下がると思っていることである。受験勉強に時間が取りづらい社会人が不利にならぬよう面接を取り入れたAO入試を行っているが、留年、退学の可能性の少ない学生を取りたいという気持ちは合否判定に影響しかねない。

社会人と新高卒学生が混じっているのは悪いことではない。教室も若返るし世代間の交流も生まれる。しかし社会人がマイナーな存在になってしまうのは問題である。社会人以外は、授業を担当する教員も含めて夜遅くや土曜の授業開講を望まない。次第次第に社会人が出席できない明るいうちから開講する授業が増え、社会人が学ぶチャンスは閉ざされていってしまう。

社会人に学びのチャンスを与えるのが夜間主の目的であるならば、留年数や退学数での評価は避けるべきである。もし既にそのような評価はしていないならば、それが学長や理事だけでなく実際に授業や入試に携わる大学教員全員にもしっかりと伝わるような工夫をして欲しい。